

山口洋装文化の礎を築いた女たちの明治維新

～毛利勅子、中村ユス、香川昌子を中心に～

発表者 山口県立大学大学院企画デザイン研究室

高橋 潤一郎

武 永 佳 奈

1 発表概要

「山口洋装文化の礎を築いた女たちの明治維新～毛利勅子、中村ユス、香川昌子を中心に～」について、発表します。地方での服飾文化や服飾教育の研究は少なく、山口の服飾文化についてもまとまった研究や資料がありませんでした。そこで、明治改元150年を機に、山口の明治維新前後の服飾教育の実態を明らかにすること及びマッピングを中心に山口の服飾文化を可視化するツールを制作することで、新しく女たちの明治維新像を創出し、山口服飾文化を伝播することを目的に研究を開始しました。

山口における明治維新前後の裁縫私塾の文献・資料の調査、各学校顕彰資料及び学校保存資料の調査、中心人物ごとの先行研究と調査、山口市に寄贈された裁縫雛形の調査、卒業生への聞き取り調査、現地調査及びマッピング、クリスマスクリエーション2017でのパネル展示、パンフレット制作の流れで調査を行いました。

山口県では安政年間に作られた岩国藩の女塾をはじめ、全国的に見ても比較的早い段階で裁縫私塾が設立され、明治末期の段階で山口市内では8校の実科諸学校がありました。その設立には女たちの明治維新がありました。その多くは現在の山口県の高等教育に継承されていました。特に研究対象として取り上げる毛利勅子、中村ユスそして香川昌子の3名の教育活動は、当研究室で毎年行っているクリスマスクリエーションをはじめとした県内のファッションイベントに精力的に出品するなど、現在でも服飾教育に力を入れている山口県立厚狭高等学校、中村女子高等学校、宇部フロンティア大学付属香川高等学校へ継承されており、研究対象としました。複数の女性を対象に調査し、彼女らの軌跡を関連させながら見ていくことで、山口の明治維新前後から大正にかけての服飾教育の実態が見えてきました。

3名の研究対象について、研究を通じ見えてきた人物像を御紹介します。毛利勅子は日本初の女校長として知られています。明治6年に日本で3番目

の女学校である船木女児小学を創設しました。船木女児小学は現在の厚狭高等学校の前身です。勅子は徳山毛利家8代、広鎮の娘で英才教育を受けて育った多才な女性でした。厚狭毛利家の元美に嫁ぎ厚狭へと移り船木女児小学を開き、日本初の女校長、さらには女性教員として山口の女子教育の基盤作りに貢献した人物です。中村ユスは慶応3年に山口市で中村裁縫塾を開設しました。中村裁縫塾は現在の中村女子高等学校の前身です。ユスは萩毛利本家の着物の仕立てを生業とする本間家へ嫁ぎ、裁縫の技術を磨きました。藩主の山口移鎮に伴い山口で藩主居館の奥女中らに和裁を教えたのが中村裁縫塾の始まりだと言われています。さらにユスは当時最先端であった渡辺式裁縫教授法（雛形裁縫教育）で知られる東京裁縫女学校へ行き、その手法を持ち帰りました。新しい教育法の導入により山口の裁縫教育の発展に貢献した人物です。香川昌子は明治5年に愛媛県に生まれ、現在の日本南画院で学ぶなど、南画と刺繍の得意な芸術に秀でた女性でした。廃藩により宇部市に移り住んだ昌子は、その芸術性を買われ勅子が創った船木女児小学を前身とする德基高等女学校の嘱託となります。勅子の築いた教育に触れた昌子は、その後の明治36年に厚狭郡藤山村で現在の宇部フロンティア大学附属香川高等学校の前身である香川裁縫女塾を開きました。自身の南画を刺繍の図案として取り入れるなど、芸術性の高い教育を行いました。

具体的な調査内容について発表します。まず、創立85周年や100周年を記念して各学校が編集し発行した各学校顕彰資料を調査しました。学校の変遷が主な内容ですが、創設者についての記述があり、パンフレットにある年表も顕彰資料を基に制作しました。次に各学校の保存資料の調査を行いました。保存資料には学校側が把握しているものもありましたが、段ボールや木箱等に乱雑に入っている内容の把握されていない未整理のものや保管場所も分からないものなどがありました。今回の調査では学校側が把握しているものと内容を把握していない未整理のものの一部を中心に調査を進めました。未整理の資料の中から発見したものに勅子の写真があります。厚狭高等学校では、勅子の姿は肖像画でしか残っていないとされていました。「毛利勅子先生略伝」の中にも「開校式に一度生徒と共に撮ったもの（校舎正面で生徒数十名と）があったが、今に至るも行方知れず。」と言う一文があり、写真資料がないとされていました。勅子には肖像画がいくつか残されており、これまで写真の代わりに肖像画が使われていましたが、未管理のアルバム資料の裏に「勅子」と書かれた写真が見つかりました。当研究で制作したパンフレットには若き日の姿ではありますが、こちらの写真を使用しています。また、中村女子高等学校では未整理のダンボールの中から中村女子高等学校編集『創立100周年記念』の冊子が見つかりました。その中には野田塾と

記載された中村裁縫塾の写真が掲載されていました。各学校所有資料は校舎や人物、人物の私物等のヴィジュアル資料の収集に役立ちました。

先行研究が一番充実していたのは勅子でした。周南市美術博物館編集の『周南の近代を彩った人たち周南人物伝2—社会実業家・女子教育編—』の資料など年表としてまとめられた資料もありました。勅子の創設した船木女兒小学は勅子の死後からの展開が大きいいため、厚狭高等学校の顕彰資料と合わせることで、その後のマッピングを行っていきました。調査を進めると、勅子の徳山から萩を経由した船木への輿入れの際にはかなりの服飾・装飾品の移動があったことが分かりました。服飾・装飾品の内容の分かる資料として「毛利勅子御引越一件記5御道具・御衣類」があることが分かりましたが、衣類部分の読解は今後の研究となります。「毛利勅子先生略伝」や「船木郷土史話」では御道具だけでも数百に及ぶ旨が記載されており、今後の調査において貴重な資料であると言えます。

ユスの先行研究は少なく、中村女子高等学校の顕彰資料を中心に調査を進めました。「百二十年史」には、ユスが渡辺裁縫女学校で研修を行ったという記載がありました。その後に行った国立国会図書館での調査から、渡辺裁縫女学校は、当時の裁縫教育で最先端であった雛形裁縫教育を行っていた東京家政大学の明治から大正にかけての愛称であることが分かりました。また、そこでユスが編み物の技術を習得したという記述から東京家政大学の編み物の雛形や授業導入の状況を考慮し、年表に取り入れました。ユスは萩毛利家の仕立てを生業とする本間家に嫁いでおり、本間家の場所は角川書店の「角川日本姓氏歴史人物大辞典35山口県」及び毛利家とその家臣の苗字が記載された萩城下絵図を使用し特定しました。「山口郷土読本」には本間家での技術の習得が開塾にあたり非常に役立った旨が書かれています。

昌子も香川高等学校の顕彰資料を中心に調査しましたが、比較的学校の創設年が新しいこともあり、ヴィジュアル資料が充実していました。スライド16頁左上の写真は生徒の出産時に昌子が作り送ったよだれかけです。その右の「ミシン裁縫独習案内：婦女教育」にあるように、当時の裁縫教育は服の形や作り方を学ぶことが中心でしたが、昌子の作品には南画が記載されるなど芸術性の高いものでした。左下の写真は三越などで販売されていたと考えられるものですが、市販のものと比較しても昌子の作品には高い芸術性が認められます。また、昌子の描いた日本画下絵手帳も残っていました。昌子の描いた図案を元に学生が刺繍した作品も残されており、昌子自身がデザインを考案して教育するなど先ほど御紹介した当時の裁縫教育のトレンドと比べて先進的な教育をしていた様子が分かりました。スライド18頁に記載していますが、「香川昌子伝」に香川高等女学校創立三十周年記念式典における

昌子の式辞一節が載っており、德基高等女学校に嘱託として勤務していた際に山口等の地方で行われていた女子教育の現状を問題視し、女塾及び学校創設の志を強めたことも分かりました。また、女絵師として知られた昌子は、当時の女絵師に対する評価の低さや出身学校や肩書きを尊重する官僚の仕事にも遺憾を示していたことが同本に記載されています。昌子の創設した学校は何度も県立移管の話があったようですが、そのような考えの下、昌子は頑なに拒んで私学のまま自身の芸術性を組み込んだ教育を貫きました。

山口市下小鯖在住の甲良ハツヨ氏から山口市に寄贈された裁縫雛形についても調査しました。この裁縫雛形は現在山口市歴史民俗資料館に所蔵されており、研究協力者である山口市歴史民俗資料館湯川学芸員の立会いの下、調査を行っています。裁縫雛形は学生が裁縫の練習で作る衣服のミニチュアです。当時、師範格の免許を取得するには年間200着近い作品を作る必要があったため、裁縫雛形を利用することは材料費や素材、時間の節約になりました。裁縫雛形を導入した教育は当時最先端でした。裁縫雛形には合格すると検印と言われる合格印が押されます。寄贈された裁縫雛形には中村裁縫女学校の検印があることから、この裁縫雛形が中村裁縫女学校の名称が使用されていた明治33年から大正2年のものであることが分かりました。その他にも大正初期に発行された裁縫教科書の調査も行いました。雛形教育で知られる東京家政大学の博物館には明治30年から昭和18年の雛形が所蔵されており、かなり早い段階から山口（中村裁縫女学校）でも雛形教育が取り入れられていることがうかがえました。雛形には少量であるが洋裁のものもあり、明治33年から大正2年の間に洋裁教育がスタートしていることも分かりました。

昌子晩年時の卒業生である伊藤万知子氏（昭和17年、香川高等女学校へ入学）の聞き取り調査も行いました。昌子が芸術面で非常に評価を受け、地主であった紀藤家や大石家から支援を受け私塾を創設出来たことや、当時の授業の様子などを聞くことが出来ました。当時の香川高等女学校では洋裁教育はまだ始まっておらず、和裁のみの授業であったようです。ここから同じ県下でも学校によって教育内容が異なっていることが分かります。昌子は刺繍の技術が特に高く、宇部市渡辺翁記念会館の緞帳なども手掛けていました。また、後のマッピングにつながる場所の確認も行うことが出来ました。

東京都では、ユスが学んだ東京家政大学を中心に、当時最先端であった雛形教育から裁縫教育の実態調査を行いました。東京家政大学博物館では雛形教育の考案者である渡邊辰五郎についての資料調査や学芸員への聞き取り調査及び「重要有形民俗文化財 渡辺学園裁縫ひな形コレクション」から編み物の授業の導入時期についての調査を行いました。また、雛形を製作する際

の道具についても実物を見学しましたが、山口の学校保管資料の中にそういった道具は確認できませんでした。湯島にある東京家政大学の前身である和洋裁縫伝習所の跡地には創設者である渡邊辰五郎の名前と共に和洋裁縫伝習所の説明が記載された看板が設置されていました。

山口県内でも、勅子、ユス、昌子の軌跡を現在の住所を元に調査しました。勅子の軌跡については宇部市学びの森くすのきに協力を仰ぎ、現地を訪れました。昌子については聞き取り調査を元にマッピングしました。香川裁縫女塾跡地、德基学舎跡地、厚狭毛利家居館跡地には、石碑や木製のポールが建てられていましたが、東京都のものとは比べ解説が少なく目立たない印象でした。ユスに関しては、ゆかりの地に石碑や看板はありませんでした。マッピング作業の例として、中河原の寄宿舎についてお話ししたいと思います。中河原の寄宿舎は後の末永写真館であるとの記述が「百二十年史」にありました。そこから山口県文書館所蔵の「大日本職業別明細図山口県山口市他」の昭和8年の地図と現在の地図と照らし合わせ場所の特定を行いました。場所の特定においては現在にも残る寺の位置が非常に参考になりました。

最終的に製作するパンフレットの構想を検討するにあたり、山口市内で比較的調査を進めやすかったユスについてのパネル展示を中間発表として行いました。パネルは人物年表とマップにヴィジュアル資料を入れて制作することにしました。クリスマスクリエーションにはデニムファッションコンテストの参加者として各学校も参加していたため、パネルを見ながら今後の学校保存資料の調査やパンフレット制作について意見をもらうことが出来ました。

資料から取得した写真や現地調査での撮影写真を使用し、パンフレットを制作しました。

パンフレットは観光を意識し、持ち運びやすさと見やすさの両立を目指し、A3サイズのDM折で制作しました。表面には研究対象の女たち3名の写真と研究タイトル、各人物の年表、山口の服飾文化の解説を載せました。裏面には、女たちの軌跡を現代の地図上に表したマップと、各ポイントの写真と解説を載せています。マップ内の番号が表面の年表の番号とリンクするようになっています。山口県立美術館や新山口駅等へ配布しました。

研究結果ですが、まず、山口の女塾や女学校の服飾教育が現代の高等学校教育へつながっていることが分かりました。また、各学校の創始者の功績は単独で研究されてきましたが、3者の軌跡を同時に扱うことで、山口の服飾文化と毛利家との関わりが大きいことが明らかとなりました。具体的には、勅子の徳山から萩を経由した船木への輿入れの際にかなりの服飾装飾品の移動があったことやユスが毛利家の服の仕立てで裁縫技術を培ったこと、また萩毛利家の山口市移鎮によりユスが山口で裁縫私塾を開くことになったこと

などです。また、勅子創設の後進校である德基高等女学校へ囑託として勤めたことが昌子の私塾の創設動機に大きく関わっていることなど創設者間同士でも影響があったことなども分かりました。それに加え、出来上がったパンフレットは山口の服飾文化をまとめた資料となり、山口服飾文化を伝播するツールとして各機関へ配布され活用されています。

山口の服飾教育は後身の高等学校関係者によって、個別に調査されてきました。勅子、ユス及び昌子の3人の活動を同時に研究することから、明治維新前後から大正にかけて、山口固有の文化・教育環境の背景や関連性が見えてきました。しかしながら、各高等学校で資料が十分に整理・保管されておらず、把握されていない資料や保存資料の年代が特定できないものもあり、また、服飾教育の資料として価値の高い裁縫雛形や教科書類も非常に少ないのが現状です。今後は、各学校の同窓会などに資料や情報提供をお願いするなどして、資料を豊かにしていく必要があると考えます。そうすることで更なる保存資料の発見や年代の特定が進むことが期待できます。また今回制作したパンフレットについてもより具体的な活用につなげていきたいです。パンフレットによる山口服飾文化の伝播により、山口服飾文化関連スポットへの看板の設置など観光面の発展へも繋げていきたいです。

2 質疑応答

(質問)

服飾文化に注目された点が新しいのかと思いました。資料がまとまってない中で、研究が難しいところもあったかと思いますが、今後、この研究分野でどのようなことが期待されますか。

(回答)

この研究を通じて、山口歴史民俗資料館に保存してある裁縫雛形について、一緒に寄贈されている写真資料から、明治42年頃のものとして年代を特定することができました。また、研究後の調査で未整理の学校保存資料の中に大正3年にミシンの授業を導入している規則の資料を確認しております。これらを踏まえ、今後、雛形教育や洋裁教育の導入時期が具体的に明らかになるものと考えています。また、先ほどの説明の中では東京家政大学等にありました裁縫雛形に使われている道具類は香川高等学校の保存資料からは見つからなかったと発表しましたが、山口歴史民俗資料館に雛形尺らしき約1/3スケールになった物差しが見つかりました。その物差しと東京家政大学に保存しているものとは多少スケールの差があります。こうしたことから山口における雛形教育の特色を明らかにすることができるのではないかと考えていま

す。いずれにしても、今回の調査で未整理の学校保存資料が多くあることが分かりました。そのような資料の発掘・調査をさらに進めることで山口における服飾文化やその特色がさらに明らかになると期待出来ます。